



山小屋へ来た人々



源じいさんの山小屋

たなかいつけい

山小屋へ来た人々

山の、いただきにのこっていた陽のなごりが落ちて、山々のすがたが影絵になった。源じいさんの山小屋に夜がきた。秋もふかまった山は、夜になると寒くなった。源じいさんは、ストーブにまきをいれた。火が燃え上がりパチパチとかわいた音をたてた。

ランプに灯をいれた、源じいさんはテーブルについて、大好きな酒を茶わんに注いでうまそうに飲んだ。

「はあー、うまい、あつたまるわい」

手で口をぬぐった源じいさんは、目を細めた。

「きょうは、お客もないし、ゆっくりするか」

そう、つぶやきながら、空になった茶わんに酒を注いだ。

空は、雨雲がおおい、いまにも雨になりそうだった。しだいに夜もふかまり、まっくらになってきた。

「トントン、トントン」

入口のドアをたたく音がした。

「はて、いまごろだれだろう」

源じいさんは、すこし酔った足どりで、立って行ってドアをあけると、登山すがたの若者がたっていた。

「こんばんは、今夜ここに泊めていただけませんか」

予定よりおくれて、目的地までいけなかった登山者のようだった。ときどき、予定が狂ったり、道に迷ったりする登山者が、源じいさんの山小屋の灯をたよりに来て泊まっていくことがある。

「いいですよ、さあ、入って入って、外は寒いだろ」

若者をストーブの近くの椅子にすわらせると、新しい茶わんに酒を注いでてわたした。

「酒は飲めるじゃろ、からだがあつたまるぞ」

「ありがとうございます。いただきます」

若者は茶わんの酒をひとくち飲んで

「ああ、おいしい、お酒を飲むなんて、何年ぶりだろう」

「そりゃあよかった。酒だけはたくさんあるからな、えんりよせずに飲んどくれ」

源じいさんも、茶わんに口をつけた。

「ようやく、この山小屋へ来ることができました」

「ほう、ここへ来たかったんですか」

「そうなんです。何年もここへ来たかったんですけど、なかなかたどりつけなかったんです。今夜ようやく来ることができました」

源じいさんは、ちょっと考えて

「ほう、それはよかった」

そう言って、もういっぱい酒を注いだ。若者は、礼をいいながら注いでもらった酒を飲んだ。

「おいしいですね、体中にしみわたるようだ」

源じいさんは、そんな若者の言うことに、うなづきながらストーブに新たにまきをくべた。

ストーブの火は、パチパチと音をたてていきおいよく燃えていた。しずかな山小屋にドアをたたく音がひびいた。

「おやおや、まただれか来たようだ」

源じいさんは、ゆっくり立ち上がると、入口のドアをあけた。白いコートを着た若い女の人が入っていた。

「すみません、灯をたよりに来ました。今夜泊めていただけないでしょうか」

女の方は寒そうにコートのえりを両手でたてながら言った。

「どうぞどうぞ、お入りなさい、さあストーブのそばへすわってください」

源じいさんはストーブのそばへ椅子をもって行って、女の人をすわらせた。

「こんばんは」

女の方は、椅子にすわっている若者にあいさつをした。

「こんばんは」

若者もあいさつをした。そんなふたりを見ながら

「今夜は客が来る予定がなかったもんでな、なにもないがの、スープをあっためよう」

源じいさんは、スープをあたためて女の人にすすめた。

「ありがとうございます」

源じいさんからスープの漏らされた皿をうけとった女の方は、スプーンでひとくちすすり言った。

「ああ、おいしい、こんなにあたたかくて、おいしいスープはひさしぶりだわ」

「それはよかった」

「この山小屋の灯をたよりに歩いてきたのよ。長かったわ。もっと早く灯をみつけていたらよかったのに、でも、ようやくたどりついたわ」

山は、雨になったようだった。しとしととあめの音がきこえはじめた。しばらくすると雨の音をかき消すように、いきおいよくドアがたたかれた。

「はてさて、またまただれかきたようじゃ」

源じいさんがドアを開けると、雨にぬれた何人もの子供たちが、寒そうに肩をよせあって立っていた。

「ぼくたち迷ってしまったんです。泊めてください」

男の子が言った。

「さあ、さあ、みんな入ってストーブのそばへ」

子供たちの着ているものは、雨にぬれてぐしょぐしょだった。源じいさんは、ありったけのタオルをかかえてきて子供たちにわたし、ストーブにまきを追加した。ストーブは真っ赤になるほど燃え上がり、山小屋のなかはいままでいじょうにあたたかくなった。

「さあさあ、あついスープだぞ」そう言いながら、源じいさんは子供たちにスープの入った、カップをわたした。

「あついから、やけどせんように気をつけて飲むんだよ」

子供たちは、フーフー言いながら、スープをすこしづつ飲んで

「ああ、あつくって、おいしいや」

「うん、こんなおいしいスープははじめてだね」

「ここへ来られてよかったな」

「おじいさん、ありがとう、そとは冷たくて、暗くて、こわかったよ」

源じいさんは、くちぐちに話をする子供たちをみて、にっこりうなづいていた。

にぎやかな夜もふかまっていき、やがて静かになった。いつしか雨もあがり、空には、星がまたたいていた。

源じいさんは、ふと目をさました。頭をもちあげて、小屋のなかをゆっくり見まわした。カーテンのすきまから、朝の白々した光が見える。源じいさんはゆっくりとおきあがり、もういちど小屋のなかを見まわした。

だれもいない、若者も、女の人も、子供たちも、だれもいなかった。源じいさんは、両手で顔をこすりながら立ち上がり、入口のドアを開けた。

そとは、朝もやがかかっており、まだ太陽は登ってなかった。ひんやりした朝の冷気が源じいさんをつつんだ。高台にあるお花畑の方をみたときだった。若者を先頭に、女の人と子供たちが、歩いて行くのが見えた。

「おーい」

源じいさんが呼ぶと、みんな立ち止まって、ふりかえった。

「おーい」

もういちど、手をふりあげて呼ぶと、みんないっせいに、にこにこしながら手をふりかえした。

源じいさんには、みんなの声が聞こえたような気がした。

・・・ありがとう、たのしかったよ・・・

源じいさんが、手をあげながら見ていると、若者を先頭に歩きはじめた。源じいさんがみんなの後姿をみおくってたちすくんでいた。やがて太陽がのぼってきた。朝もやはれて、山の上にある雲が、朝陽をうけて、金色になり赤くなり、紫、青、緑、さまざまの色にそまった。やがて山のいただきに太陽が顔をだした。お花畑には色とりどりの花が咲いていた。源じいさんは、お花畑を横切って、みんなの歩いていったほうへ、

歩いていった。お花畑の先は崖になっていて、ふかい谷をはさんで高い山々がつらな

っていた。

空の高いところから、声が聞こえた。

「ありがとう、源じいさん、楽しかったよ」

源じいさんは、空にむかって手をふった。

おわり